

タック・ラム著 川口健一編訳

『農園の日差し』

(大同生命国際文化基金)

一九六三年、南ヴェトナムのゴ・ディン・ジエムが暗殺されたとき私はアメリカにいてそのニュースを聞いている。その直前に夫人のマダム・ニューは娘とともにアメリカ政府の招待を受けてアメリカ各地を旅行中で、二人の記事が連日、新聞を賑わしていた。独特のおしゃれなサンングラスをかけた美女のマダム・ニューは、圧政に抗議する僧侶が公衆の面前でガソリンをかぶり焼身自殺を図ることへの感想を求められ、「僧侶のバーベキュー」と言つてアメリカのマスコミを喜ばせ、良識ある人々の矚目を買っていた。そしてこの旅行の最後にはゴ・ディン・ジエムの惨殺死体の写真が載ったのだった。アメリカ招待旅行はマダム・ニューと娘を暗殺から逃れさせるための手段だったのかと疑った。

これは私がヴェトナムを意識した初めての出来事だった。それからアメリカは北爆を開始したのだが戦争は泥沼化し、やがてニクソンはヴェトナム撤退を決意し、七五年にサイゴンが陥落してアメリカは敗北し

た。その後、ドキュメンタリーやヴェトナム帰還兵の書簡集の刊行、映画「プラトゥーン」などヴェトナム戦争関係のものが多く目に触れるようになった。それでも「負けた戦争」をアメリカ人は認めがたく、その言葉を「少なくとも一九九〇年代になるまでほとんど」というより事実上けつして——公然とは口にしなかつた(生井英考著「負けた戦争の記憶」という。七〇年代後半にはポート・ピールが注目され、ヴェトナム難民の子供が「スペリング・ビー」と呼ばれる全米規模の綴り字競技で一番になったと新聞で騒がれた。ヴェトナムの子供の数学能力は高いという試験結果に納得しないアメリカ人が多かった。

アメリカを研究する者にとつてヴェトナムはこのように六〇年代の戦争の記憶と密接につながっている。ヴェトナム帰還兵の戦争後遺症の問題はこれまでの勝った戦争の後とは違つてより深刻で、お国のために戦つたつもりがいつの間にかアメリカでは反戦運動が盛んになり、仮説ドミノ理論で納得できるような正義の戦争ではないと考えられるようになっていたから、「ベイビー・キラー」と罵られる帰還兵はアメリカ社会に復帰する足場を見つづけるのが難し

かった。それで今でもアメリカ文学では「ヴェトナム戦争」が文学の題材になっている。

本書『農園の日差し』はそのようなヴェトナム戦争とはまったくかわらない、はるかに前の物語である。作者のタック・ラムは一九一〇年にハノイで生まれ、一九四二年にハノイで死んでいる。短い生涯ではあったが、兄のニヤット・リンたちが結成した文学グループ「自力文団」のメンバーになり、ヴェトナムの近代文学の形成を担つたと訳者の解説にある。一九二〇年代から三〇年代のヴェトナムの人々とその暮らしを繊細な感性と若者らしい視点から描き出している。

ヴェトナム戦争とはまったく関係のない時代と書いたが、タック・ラムの作品を読みながらヴェトナムに派遣されたアメリカ兵のオーラル・ヒストリー『我々が持つていたすべて』や故郷への書簡集をまとめた『ディア・アメリカ』を思い出した。あるアメリカ兵がヴェトナムの田舎について語つた文章が強く印象に残っている。ヴェトナム戦争で前線に送られたのは田舎から出てきた純朴なアメリカン・ボーイが多かつたというから、おそらく

多くの兵士にとってヴェトナムは初めての「異国」であったに違いない。このアメリカの若者は図らずも率直に戦争への疑問を手に紙にしたためている。「とても静かなんだ。

緑の畑の向こうに川があつて、水草の茂みからときおり水鳥が飛び立つ。青い空に舞う白い鳥の姿を見ていると、ここで本当に戦闘が行われているのだろうかと思はれなくなってしまうよ。こわいくらいに美しくして平和なんだ」。だがそれも戦場になつた。美しくして平和な村こそ外からの力で戦場に変えられてしまうとも言いが、ヴェトナムの田舎の景色を想像しながら「ヴェトナム戦争」の悲惨を思った。

そして本書の表題作「農園の日差し」にやはり美しい田舎の描写を見出したとき強く心に響いたのだ。日差しは川で光り輝き、西の方では空の雲がきらびやかな色彩に映え、まるで紫色になり始めた丘や畑の間に浮き上がった黄金の帯のようであつた。餌を食べに行つて戻る小鳥の一団が、翼を雨音のようにざわざわと羽ばたかせて私の前を勢いよく飛び去る。私は顔を上げて小鳥たちの躍動する黒い塊が雲にすつかり消えるまで目で追いかける」。この作品の主人公「私」はハノイの学校に

通っているが、夏の間を田舎の農園で過ごす。そこで世話になつた家族の娘とほのかな恋人同士になるのだが、夏が終わり「私」はハノイへ戻らねばならない。ひと夏の思い出と思つていたが、結婚し子供も生まれたという娘の消息に主人公は「農園の日差し」のように輝いていた二人の愛の名残を感じようとしている。

川はまた集落の境界になり、平野部の町に住む少年が登場する。「センの船着き場」では、紅河（ニ・ハー）の支流の川向かいが特別な領域になつて少年の想像を広げる。あちら岸はかつて「一度に十八人の進士」を出したところだが、盗賊の逃げ込む場所でもあつて怖いところのようでもあつた。見知らぬ秘密の領域を望みたくて少年は丘に上つて川向こうを見ると、連なる山々のなかに赤く盛りあがった丘が見える。母親はそこを桃源だと教えてくれたが、少年はその言葉に父親が話してくれた中国の物語を思い出す。「光線でもまぶやく映えた川向かい」を眺めていた少年は新しい友達を得て川向かいの世界を知るようになる。友達の姉さんや老婆まで親しみを覚えるようになった少年だったが、ふたたび家の都合でハノイへ戻ることになつた。十年後、この

地を訪ねたが渡し場で見える川は「霧がかり黒ずんだ川」になつていて、ただ「貧しい土地の寂寥」があるだけだつたと物語は結ばれている。

作者タック・ラムの作品群は男女の恋情を描いたものと民衆の貧困を描いたものに大きく分けることが出来るそうだが、その語り口の詩情ゆたかな風情が読者の心に余韻を残す。特に上の二作が私は好きになつた。初めてヴェトナム文学を読んだ、うどん売りやキャッサバ畑、ファン（縁台）、チョン（長椅子）、トゥオック・ラオ（水煙草）など不思議な言葉の響きを楽しんだ。そして中国文学の桃源の物語など私たちが文学的伝統を共有することを嬉しく思った。

（荒このみ）